
アブとアメ

イネヤマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アブとアメ

【Nコード】
N3114F

【作者名】
イネヤマ

【あらすじ】
奇才な少年少女と、友達のいない少年の話

弁当を開くとそこには、飴玉が一つ転がっていた。

「今日の弁当は飴玉か」

言うと同時に、この弁当を作ったのは自分だったと思い出して、オレはちつと舌打ちをした。

午後の昼下がり、教室の左から三つめ、前から二番目の机に座っていた。教室はざわつき、仲のいい友同士が机をよせて、弁当箱を開いていた。

オレだって例外じゃない。友と呼べる唯一の存在である榊が、オレの目の前の席に座って、弁当を広げようとしているところだ。最悪だ。

オレのまったくの気まぐれな、この飴玉が、榊という女の機嫌を損ねるのは、オレがその弁当を開いた瞬間わかっていた。だから無意識に、頭痛が起こった。

「どういっつもりなの」

予想通りに視線を受けて、明らかに機嫌の悪そうな声色で榊は言う。オレは弁当箱にぽつんとおかれた飴玉を拾い上げて、にらむように飴をみつめた。何考えてんだよ、オレは。

ソーダ味かあ。

嫌いじゃない。

「アナタ、ねえ、どういっつもり？」

イライラとした口調で榊がいう。

「ねえ、アナタ」

なんて、夫婦がまったく。別に榊とオレが、夫婦になるなんて、ごめんだけど。

「聞ってるの、アナタ？」

ますます夫婦のようだ。実際いうと、榊はオレの名前が嫌い。しい。だから、極力オレの名を呼ばないだけだが。さてはてオレは、やっと榊に目を向けた。

「ああ、聞ってるよ。」

言って後悔した。これじゃ本当の夫婦だ。だれかがこの会話を聞いていないか、ヒヤヒヤした。

案の定隣の席に座っていた男三人組が、オレと榊を交互に見て、ニヤニヤするのが見えた。ちっと舌打ちをして、オレは、言葉を付け足した。

「オレが昼飯に何を食べようと自由だろ、オレは昼ごはんは、飴を食べたい気分になるって予想してたんだよ。」

饒舌に曇りも無くはっきりと言ってやった。榊は、きょとんとするより、むしろ、むっとしている。

しかし、大声で、罵倒するわけでもなく今度は榊が黙った。言葉を発しないのは、どれについて反論をしようか迷っているからう。何をいうのだろうか。

まともなご飯食べなさいよ、
飴を食べたい気分ってどんな気分よ、
なんでそんなことわかるのよ、

っていうか馬鹿じゃないの、

幾通りの言葉をオレは頭の中で想像して、榊の言葉を待った。
榊は、イライラしながら言った。

「じゃあ飴もつと入れてきたらよかったじゃない。弁当箱の大きさと飴の大きさが比例してないわよ。」

オレは、沈黙した。というか、かたまった。

アドバイス？

オレは、なぜかイラついた。

榊は、それからずっとイライラしながら、今日の二限目の数学の授業の田中先生について、右耳を掻くクセが腹立たしい、と言うことを、ひとしきり熱弁した。弁当を食べ終わると、すばやく自分の席に戻って、数学の教科書に、でかかと油性マジックで落書きをすることで、地味な復讐をしていた。きっと次の数学の授業の日には、真新しい教科書に買い換えられることだろう。

榊は、オレの唯一の友。

榊にとってオレは、唯一の友ではない。

奴は、このクラスの誰もやりたがらない、学級委員、福祉委員、文化委員すべてを引き受けるような、仕切りたがりで世話焼きだ。そのせいで誰にでも気に入られている。もちろん教師にも。

榊はA B型だ。

それが何かに関係があるのか、といえばそうではないが、つまりそういうことだ。妙なところがあるが、それが才能といえば才能だ。奴はそうして気に入られている。

榊は、オレのことが好きだ。

うぬぼれてるわけじゃない、随分前からはつきりとした、真実だ。奴はオレが好きだとはつきりと言い張り、だからどうした、とはつきりと言い張った。これは、恥ずかしがっていった言葉ではない。奴は言った。

「私は、アナタのことを好き、それがどうしたの？」

告白されたのに、まったく嬉しくないし、返事をする機会さえ与えられなかったようで、腹立たしかった。なんだ、お前。そのときオレは榊を、一気に好きではなくなってしまったような気がする。榊は、かわいいと評判だ。

確かに言われて見ればかわいい。睫毛が長くて、手足もすらつとしていて、ロングヘアーで小柄で白くて、目の色素が薄いから瞳が茶色で外人のような雰囲気さえ感じる。

そんな榊との出会いは、単純なものだった。オレは、榊が、廊下で落としていたハンカチをボクが拾って、「おい」そういっただけだった。

それからというものの榊は、オレに付きまとうようになった。何が榊に気に入ったのかオレにはまったくわからなかった。クラスをやつらもみんな不思議がつている。オレは、友達も親もない天涯孤独の身だ、これからの人生もきつとそうだろ。

昼休みが終わると、現代国語の授業が始まった。オレはこの授業がうつとおしくてたまらない。なぜ日本人が日本人に日本語を教わらなければならぬのか。オレは純潔な日本人だ。間違いないか、と聞かれれば、確かにオレ自身が孤児で生まれも育ちもほとんどわからず、怪しいもんだが、結局は日本人だ。

そんなオレの日本語に不服なのか、お前らは。と問いたくなるが、

そんなことは出来ない。それがただの屁理屈にしか聞こえないことをオレは重々分かっているからだ。

先生の右腕が、深緑の黒板の上をゆらゆらゆらと動いている。その右腕のぶれ方のリズムでオレは、眠気が増してきた。

オレの頭もゆらゆらゆらと動いた。

すると、後ろから、紙くずが飛んできた。オレの体をかすめ、机の横に、転がった。

（この紙はオレには関係のない紙だ）

言い聞かせて、オレはその紙を横目でみて、無視した。先生は直も黒板と向き合っている。周りの生徒はそれを黙々と移すばかりだ。

オレも移し始める。うつむいた瞬間に、今度は流れるように丸まった紙が転がってきた。周囲の人間が、オレに視線を送る。誰も拾おうとしない。間違いない。

（オレかよ）

拾い上げて、紙の中をしてみる。誰が書いたのか分からない。ただそこには、雑な字がかかれていて、

（寝るな）

と書いてあった。

誰がこんなクソ真面目がことをするんだよ、寝ていても誰も迷惑しないじゃないか、おせっかいにもほどがある。

オレは、イライラして、その紙をもう一度ぐしゃとつぶした。

オレには友達ひとりしかない。おせっかいを焼くような奴はひとりしかない。

榊だ。

授業が終わり、即効で、榊の机に近づくと、オレはあからさまに不機嫌な顔で、榊を見下ろして眉をよせた。榊は涼しい顔をしている。それがまた腹が立った。

「おい、どういっつもりだ」

また、夫婦の喧嘩のようなことをいってしまった。半ば後悔して、榊を見下ろした。

「どういっつもりってどういっつことよ？」

榊は、「は？」という挑発的な態度をとった。

オレは、さらに腹が立っていた。しかし、落ち着いて、先ほどの紙くずを、榊に手渡すと、榊は、「ああ」と軽くうなずく。やっぱりお前か。

「私じゃないわ。見てたけれど。」

なに？

オレは一瞬「え？」ともらした。じゃあこれをよこしたのは誰だ？むしろこれはオレ宛じゃなかったのか？だけれど隣の席の奴らはオレだと促したじゃないか？

オレが不思議がつっていると、榊は、もうその紙自体に興味がなくなつたように、席を立ち、隣に座っている女子とのたわいの無い会話を始めた。これ以上会話が無駄だと思つたらしい。こんな女に好かれていたってやっぱり嬉しくない。

オレが紙を広げその文字を、榊の机の広げたままのノートの字と照らし合わせると全然違つた。榊は、教科書のような字を描いている。シャープペンで、綺麗に。

一方紙に書いてある字は、雑で、しかも鉛筆でなぐりがきしてある。

明らかに違う。

オレは、自分の席にしぶしぶついた。

だれだ？

オレは周囲に目を配らせる。すると、隣の男子グループが、にやにやと笑いながらオレを見ていたことに気がついた。

「その紙、誰が書いたか知りてえのか？」

意地悪そうな口調にオレは、無視をした。こんな奴らに、お願いします、なんて聞くぐらいなら、もうこれをオレに送った相手なんて知らなくても別にいい。その様子をみて、「えっ、聞けよ、もつと」とその男子グループが寂しそうな顔をした。そしてあせった風にオレに話しかける。

「羅生だよ！羅生力ズキ！」

羅生力ズキは、クラスのボス的な存在だ。

榊栞と学級委員を組み、学校を支配しようなんて馬鹿なことを考える一人であり、奴も何故かA B型だった。羅生はいつも髪の毛の黄色い連中と悪巧みをしている奴だ。深夜に爆竹を鳴らして、警察に連れて行かれたこともある。それに、クラスの間一人ひとりに嫌がらせを徹底的にする。

羅生力ズキは、危険人物なのだ。

しかし、オレとはまったく話したこともなかった。羅生はオレは一切ちよっかいをださなかった。クラスで浮いている存在であり、ターゲットにしやすいのに、そういったことをしなかった。オレはなんとなく分かっていった。オレが一人で居るときの、羅生の薄ら笑い。

シカト。

という行動が、彼にとって「いじめる」ということだったのだ。そんな羅生カズキがオレにコンタクトを取り始めるなんて予想外だった。

かなりの危険だ。オレは、一気に気持ちが悪くなった。隣の男子グループは、そんなオレの様子をみて、せせら笑っていたが、オレはそれを屈辱だとは全然思わなかった。そんなことより、ただ、怖かった。

オレは、ぐしゃぐしゃに丸まった紙をぎゅっと握った。

羅生の席は、一番後ろのドアに近い隅の席だ。

授業にふけやすいように、羅生自身が勝手に決めた席だ。オレはそちら側をふりかえることすらできなかった。羅生の嬉しそうな、意地汚い笑いを見るのが怖かった。

全ての授業が終わり、オレは、さっさと家に帰ろうと思い、すぐに身支度をした。いつもなら図書館によって閉門されるギリギリまでいすわるのだが、そんな余裕なんてなかった。

ただ、自分は早く家に帰った方が良く、という思いしか浮かばなかった。

「もう、かえるの？」

声をかけてきたのはもちろん榊だった。少し寂しそうな声で言う。いつも放課後は榊と図書館で、たわいのない話をしたり、無言で本を読んだり、空を眺めたり、そんなことをやっていたから、オレが、なぜこんなに早く帰るのか理由を聞いたそうだった。だけれど、今のオレには余裕がなかった。

ただぞつとする恐怖を感じていた。

何故か、感じていた。

オレは、榊栞に向かい合う。

「気分が悪いから帰る。」

「気分が悪かったら、保健室に言った方がいいわ、家には誰もいないじゃない。」

「じゃあな。」

榊栞はまだ何かいいたそうにしていたが、オレは振り切って教室をでた。額から冷や汗がにじみ出た。

一気に寒気がおそってきた。それと同時に、後ろから、やけに澄んだ声が響いた。

「気分が悪いなら、保健室に連れて行ってやってもいいぜ。」

あざ笑うような笑みを浮かべ、羅生力ズキは、オレの背後に立っていた。

オレは結局のところ、人間の中でも底辺の生き物だな、と感じることがある。オレと同じ服を着ている奴がいたとき。オレと同じことを言っている奴を見たとき。オレより頭の良い奴。オレより顔の良い奴。オレよりガタイのいい奴ももちろんだ。

そんな奴らと出会ったたびに、コイツにはかなわない、なんて思っている自分が嫌だった。自分が、この世でなんとも無い底辺だって認めるときだから。

他人を意識しすぎ？

オレはオレでしかない？

そんな軽い言葉ではとりつくるえない。だってオレはオレでもオレ以外の人間が存在する中で生きている。絶対、オレという意味は、オレ以外の人間に影響されてしまうから。オレはオレ、じゃないん

だよ、多分。

他人の影響を感じるときなんてものは分からない。だけれど、他人の影響を受けたときというのは、なんとなく分かってしまうものだ。自分の作品が、どこかの誰かの違う人の作品と似ていたら、これは影響なのだと、わかってしまうのとおんなじで。

影響されるって、底辺の生き物ってことだろ？

それを超越して、どれだけ独創性があるかってのが、今現在のヒエラルキーなんだ。

だからなんだって？

独創性のある奴は特だって話だ。

「アンタさあ、俺の友達になんね？」

羅生力ズキは、そういうだけだった。

羅生力ズキの独創性に、オレは、困惑しっぱなしだ。

*

例えば、オレが羅生に対して「嫌い」な感情を抱いていたとして、そこに友情があるかと聞かれればもちろんそこに、「友情」なんてものはない。変化する可能性があったとしても、それは今現在では「友情」なんかない。

しかし、その人物に対して「恐怖」を抱いている場合はどうだ。

オレの場合、羅生に対してはその気持ちしかなかった。「恐怖」は「友情」と繋がるか？

「恐怖」は「嫌い」とは違う気がする。オレが、羅生に対して感

じているのは、「不思議でわからない」だから「怖い」だ。

良い風にいえばミステリアスなんだ。

そうじゃないか。

そう思わないと、だめだ。

「い、いいよ」

オレは知らず知らずのうちに答えていた。

オレは、羅生が怖くて「友情」を決断しただけだった。

羅生は嬉しそうにニヤリと笑った。それは普通の人間のさわやかな笑いなんかじゃなく、いつもの意地悪そうな微笑に近いものだった。オレは、引きつりながら、その笑顔に合わせた。

「はードキドキしたぜ、友達にならね？とか初めて言ったわ、俺。」

確かに、オレも初めて言われたよ。と言いたかったが、オレの言葉をどこまで素直に羅生が受け入れるのか不安でしかたなくてオレは、ただ黙っているだけだ。

「今日も、図書館行くのかよ？」

「…え？」

「いつも、図書館でぼーっとしてるだろ？オマエ。」

「あ、ああうん。」

なんでそんなことをしているのか、と言い掛けて、オレの言葉は飲み込まれた。しかしそれを察したかのように羅生は言う。

「校庭から図書館みえるんだぜ、オマエいつも窓際に座るからな。」

羅生は思ったより気さくに話していた。周囲の人間は羅生のそんな様子に困惑しているし、もちろんオレ自身も、困惑していた。このいつもとのギャップはなんだ。

「きよ、今日は図書館には行かない、ちょっと気分が悪いんだ。」
「嘘だな。」

にやりと意地悪い表情がみえてオレはビクツと体をビクつかせた。これは決して驚きではない。恐怖だ。

「ふうん、なるほどね。そうそう。へえ。」

「・・・なに？」

「俺が怖くて逃げだそうとしてたな？ふんふん、なるほど。へえ」
「」

わざとらしくも羅生は言ったがオレの本音だったので、体がこわばった。これが何かの冗談だったらいいが、コイツはおどけた顔で急に殴り掛かったりするような奴だ。十分な注意が必要だ。
オレは一步下がった。

「一步下がるってことは、正解ってことでOK？」

「ごめんほんとうに気分が悪いんだ！だからこれ上げるから今日は、みのがしてくれないかな？」

オレは、なんてばかなんだと思った。

「みのがして」とか完全に自分の立場が逃げていると言っているようなもんだった。だがオレの思考回路なんて所詮突然の出来事にはその程度にしか反応できない。とりあえず、明日までにこの問題はもっとじっくり考えたい。

そういった気持ちだ。

とりあえず、羅生は追ってこなかった。

面食らっているようだった。

確かに、俺もさっきそいつに面食らったところなんだよ。

後ろから、羅生のつぶやくような声が聞こえた。

「俺、甘いもの苦手なんだよなあ。」

今日の僕の昼ご飯だった。

1 (後書き)

・・・つづく。

感想あれば、ぜひ。文法がおかしいのは・・・すみません。
こちらは書き貯めしてあるぶんUPです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3114f/>

アブとアメ

2011年1月6日14時33分発行